金子光晴全集

第九卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

金子光晴全集　第九巻　著者金子光晴　装幀者司修　発行者高梨茂　印刷者山田博　発行所東京都中央区京橋二丁目一　中央公論社　電話(五六一)五九二一　振替東京二―三四　昭和五十一年七月十日印刷
昭和五十一年七月二十日発行
©一九七六

小説・随想

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

〔小説〕

風流尸解記　11
樹懶　75
蛾　77
手　81
心猿　92
姫鬼　104
獲麟　133
樹懶　144

〔随想〕

人よ、寛かなれ

詩人もどき 179　立川での話 180　行通
禍 181　詩人吉田一穂の死 182　うその
皮 183　通 185　泡鳴との初対面 186
日本回帰 187　むかしのメロディー 188
筑前琵琶 190　人よ、寛かなれ 191　英
雄に嫁ぐ 192　狂言のこと 193　南と北
194　姓名のこと 196　中国留学生 197
一挙手一投足 198　武者小路さん 199
国ちがい 200　春は遅い 202　髪剃芸
203　もぐらの皮 204　人待ち 205　刀
剣の話 206　薬品マニアの話 208　忘れ
る 209　昼席 210　珍世界 211　東洋
と西洋 212　ベトナム豆辞典 214　ヒフ

の色 215　男モデルの話 216　刑罰の話 217　ある前夜について 218　サクラ 220
久米正雄のこと 221　食物のこと 222
日本人の恋愛 223　佐藤春夫と喧嘩のこと 224　詩謎 226　ニヒルの伝統 227　二人の孫 228　影響（上） 229　影響（下） 231　ピカソの死 232　歯 233　宗門 234　オクシオンの話 236　とこなめ焼き 237　随筆のこと 238

ほりだしもの

女学生 243　一口噺 245　五島ばなし 247　京都の寄席 250　完ちゃんのこと 252　江都八景・洲崎の雨 254　金策 256
珍相見 260　神楽坂 262　左 265　黒 267　黒と白 269　ホリダシモ

ノ 272　三羽烏 275　時は春老木の花盛り 278　たむし 281　昼あそび 283
さのさぶし 286　変装狂 289　あやかりまんじゅう 292　フランス新著聞集 294
桃割れの芸妓 300　明治の十代 306　わが青春の詩 313
跋 320

這えば立て

323
I　這えば立て 325
太鼓枕の記 325　名古屋時代 330　京都のころ 335　小学東京時代 340　中学落第 346　大学遍歴 351　舞台の上の猿 356
II　良妻・悪妻・いま病妻 362　うちの彼女に 362

367 この頃のこと 369 名前のことなど
372 何と昭和も五十年 374 スプーンを
指で曲げる話 376 きのうきょう 377
ピカソの死 382

Ⅲ

高山ゆき 384 大きな墓場 394 迷える
日本人の姿 396 むかしの海水服は尽きせ
ぬ味 397 茶の心知らず 400 ことばに
ついて 402

Ⅳ

テルビュルンの森 405 安土府雑感 407
エスコーを遡る 411 ワーテルロー 415
旅枕 418 職人 421 酒 424 おまも
り 426 関の西東 429 僕の画に対する
かかわりあいあるいは開眼 432 かわった
人たち 434

V

薬の話 438　糞尿の話 444　嘘の話 447
うそまこ 450　根付ばなし 451　「四畳半襖の下張」のこと 454　鼻つまり釈迦一代記 457

後記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説

風流尸解記

小序

このものがたりの筋も、でてくる人間も、すべて、作者のつくりあげた架空なものであって、いわば、空想小談とでもいうべきである。そして、話しかけるあいても成人ではなくて、ひとをあくがれ、恋いわたることを知りそめた少女たちである。ただ、話の末節や、状景のなかに、じぶんの経験した地勢なり事実なりがまぎれ込んでいる個所もいくつかないわけではないが、それも微にわたったせんさくで、つくりものののほうが中心になっていることに変りはない。かかる黄表紙本に筆を染めるのははじめてのことなので、なにかにつけてよい出来映えとは言われないし、附会した作者の気持、文学の常道を外れても、ひたすらに人物の生証拠をたずねて、二重に自然の落泊に捕われ、ひたすら翻弄されるがままになって、結局は、筋立てにかかわりなく、おのれの痩骨をさらすことに終るのだ。生物の生々繁茂も凄まじいが、生と死のあいだの筋立てはいずれも痛々しい。人間の臓腑は、他のいかなる動物よりも重たそうだ。そのことだけでも記しのこしておきたいものと考えて、この稿を書きだした。その重たすぎる臓腑のそれぞれのあり場所を探知し、剔抉するものは、医者のメスにしくものはないが、どの臓腑のもたれあいの伝統にも独自な妖氣がただよい、なめらかで清新な磨擦とゆずりあいがあって、捕捉しがたい動物共の歴史がそこからはじまって、おもいがけないうす皮がばら色の暈をひろげる。かかる次元に於て私は、一人の男と女のあいだをながめてみたかったのだ。それ故に、観念的な合言葉に終ることを怖れて、象徴的発想と手法をことさら避けて、血や、骨や、筋肉や軟骨などに直接、そのおもいを語らせようとすることがねらいであったが、彼らは果してまじめにその来歴と死にいたる道すじのエクスターズを説明しつたえてくれただろうか。いかなる作品も、そのことでは白手の賭をしてみるよりしかたがない。

九夏三伏のさなかにて

金子光晴

轍の鮒のごとく老軀をあえぎながらここに序一言。

失　明

双つの貝釦がピンと弾いて、死んだ。まぶたのうえに、墓がのりかかる。
うすぐもりの日の、さざなみの寄る湖べり、オルガンの重たいふたをおろして、君は

みえない僕の方へ、そろそろと近づく。僕の頬が、君のぬれた頬にさわる。
——おや、泣いていらしったのですね。あなたは……。
——いいえ、さっき、もう、泣いてしまったあとなのです。

なにごとであろう。内側から、止め処もなしにくずれはじめたこの物音は？
ゆかにがっくり膝をついたままで、僕はそれをきいている。
一度手放した信用は、金輪際もどりはしない。あわただしいものの気配は

ことごとく、僕から背いて、立退いてゆくものどもの息ずれ、身のうごき。

おいもい。おいもい。なぜまた僕は、逃げようと機をうかがって
さわさわとおちつかない君のこころを、放そうとしなかったのだ。
血泥で貼付いたズボンをはがすときのように
如法闇夜のふかみから、すっぽりとからだをぬけなかったのだ。

草萌いろの緞帳がおりかけていた。それほどそば近くまで来ているのに、すこしもその男が気づかないでいたそのわけは、猫族の海綿の蹠の身の軽さ、それよりも、はらりと散りかかる葩一ひらのしずかさで、その少女が呼吸をこらして、そっと、そこに坐っていたからである。
はなびらのように、息づかいも漏らさずにいる少女のこころでは、ことさらしくあらわさずに、存在を気づいてもらいたがっていたので、その男の近くというよりも、その男の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com